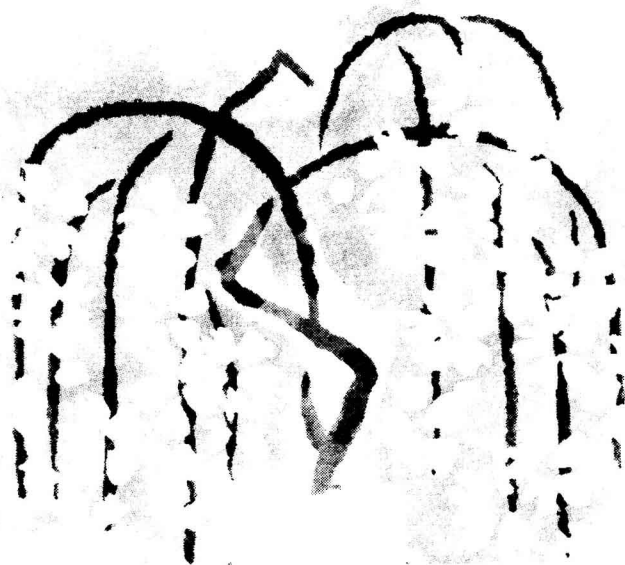


新源氏物語

川口松太郎

源氏新源氏物語

川口松太郎





新源氏物語

昭和三十七年七月一日發行

定価三九〇円

著者 川口松太郎

發行者 小野詮造

發行所 文藝春秋新社

東京都中央区銀座西八ノ四

印刷 凸版印刷

製本 矢嶋製本

製函 加藤製函

目

次

藤壺の巻 七

空 蟬 二七

夕 顔 五四

藤壺ふたたび 七八

僕流末摘花 九一

紅葉の賀 九六

ひと夜遊び 一〇三

ふた夜遊び 一二〇

花の宴 一二七

朧月夜 一二三

車争い 一三〇

葵 一四三

紫 一五〇

野の宮 一五六

伊勢斎宮 一六九

浮き沈む世姿 一七六

みたび藤壺 一八三

去り行く藤壺 一八九

大雷雨 一九六

花散里 二〇二

別れ別れ

二〇九

須磨

二一四

源氏帰還

二二五

住吉

二三〇

初老感

二三六

斎宮入内

二四四

藤壺逝く

二四八

柏木

二六一

罪障

二六四

消え行く露

二七一

雲隠

二七八

新源氏物語

裝幀
守屋多々志

藤 壺 の 巻

一

「藤壺の宮は光様の母上そっくりではありませんか」

「あんなにもよく似たお方があるでしょうか」

「生写しという言葉は桐壺様と藤壺様の事を申すのでございましょう」

そんな噂を幾度び聞いたか知れなかった。桐壺は母であり藤壺は継母にあたる。母の桐壺は源氏が三歳の時に世を去ってその面影を知る由がないのである。幼くして母を失った彼は、相見る時のないその面影に、青年らしい憧憬を持ち続けていた。昔を知る宮中の誰れ彼れは

「母上ほど美しいお方はございませんでした。どれほど美しい花にたとえてもいい尽せぬほどで、桐壺様がお廊下を

通ると禁裏中がざわめいたといわれるほどでございました」

と、源氏に教える。靱負の命婦なぞは涙を浮べて昔の母の話をする。靱負は桐壺に使われた命婦で、生前の母をよくおぼえている老婆だ。

「お亡くなりになる時は、ものの怪におそわれて息が絶えたと聞かされたがそんな事もあったのか」

「そんな不吉な話を誰方からお聞きなさいました」

「誰いうともなく耳に入った」

「それだけはお聞かせ申すまいと思って居りますのに、心ない方が多いのですね」

と、仕方なくうなずき

「今となりましてはお隠しするよりもありのままを申し上げた方がよいかも知れません。ものの怪におそわれたのではなく、人のそねみが深く積って、何人かに呪われたのです」

「呪ったのは誰だ」

「高うは申されませんが弘徽殿の女御です。桐壺様に向けられる嫉妬は、禁裏中を埋め尽すほどかしましく、弘徽殿様ばかりではなく、誰方のそねみをも受けられました。と申しますのも帝は桐壺様を溺愛なされて他の女御をお近づ

けになりませんから、お恨みが一身に集まるのも致し方がなかつたのでございます」

「御寵愛がすぎたので多勢の呪いを受けられたのだね」

「はい。沢山の呪いを御一身に受けられてしまいました」
「聞くだけでも腸が煮え返る」

「なかでも一番お恨みになったのが弘徽殿女御で、夜のお召しを頂いた桐壺様が帝の御寢所へ行くお廊下の両側には、典侍方や命婦たちが並んで見ているのです。ああ今宵もまた桐壺が行く。憎や憎や桐壺が行くと、囁き交わす声が御所中へ響き返るほどにざわめくのです」

帝には弘徽殿女御の他に承香殿、八の宮の母女御、麗景殿女御、後涼殿更衣等の方がお在でになり、宮中にそれぞれの部屋を持って勢力を争い、帝の寵を得ようとして心をくだいたものであったが、御寵愛は桐壺一人に集まって、ほかの女御たちは振りむきもなされなかつたのだ。

その溺愛ぶりが後宮の恨みを買ひ、桐壺が帝のお部屋へ行く時刻になると、御常御殿の近所がざわざわと騒ぎ出す。帝は沢山の女御たちの中からお会いになりたいと思う相手をお自分でお決めになってまだ明いうちから女御の元へお使いを走らせて置く。飛香舎にも承香殿にも麗景殿にも、美しい女御たちが帝のお召しを受けようとして思い

思いの粧いをこらしているのは、遊女が客を待っているのと同じ事で、今宵は誰がお召しを受けるであろうかと、虎視眈眈と夜の来るのを待っている。

遊女には無数の相手があつて誰かには会えるのだが、女御のお客は帝唯一人、帝がお呼び下さらなければ男にふれ合う機会はないのだから、女たちの神経は帝のお声にびりびりと慄える。ましてや夜毎夜毎のお召しが桐壺だけに決められてしまうと、嫉妬も呪いも單なる憎しみにとどまらず、真剣な生活につながって行く。中でも弘徽殿の女御は

「半年にわたつて帝のお召しを受けていない。正妻でありながら妻らしいお扱いを頂けぬのも桐壺の為だ」

と、部屋の隅に五大明王の尊像を掲げ

「自分の命を取るか、桐壺の命を取るかどうかにかして下さい。このままでは生きて甲斐のない身。生死をかけて桐壺と争いたい」

と、日夜を分たずに呪詛の経をよみ、麗景殿も後涼殿も其の他の女御も同じように呪詛をし始め、桐壺の更衣はだんだんお躰がすぐれなくなつた。靱負の命婦は今でも口惜しそに

「皆さまが残らず桐壺様を呪い殺そうとして、禁裏一带に

妖氣^{ようき}がたちこめてしまったのです」

「ああ、聞くだけでも恐い事だ」

「お話し申すのさえ恐いきわみです」

「母上は女御たちに呪い殺されてしまったのか」

「先ず先ずお聞き下さいまし」

と、命婦の声も、ものの怪につかれたように慄え、呪われる桐壺の苦しみを物語るのであったが、やがて秋が更けて庭の木が散り初める頃、桐壺の躰はすっかり痩せ細つて帝のお側に侍する事もかなわなくなり、御愛情にお底え申すすべもなくなつて、宮中を退下^{たいげ}したいといい出されてしまった。それでも帝はお許しにはならず

「何処にいて養生するのも同じではないか。病いは心の持ちよう一つであるから、それほど苦にやむ事はなく私の側にいて養生をするように」

と、言葉を重ねてお引きとめになったが、日夜を分かつたぬ呪いを受けて、五躰はいよいよ痩せ細り、ついには宮中にとどまる事も出来なくなつて

「ものには限りがありますゆえ、これにてお暇を賜わりますように」

と、衰えた躰を起していえば
「それならば里屋敷まで送って行こう」

と、御自身に送りたいとおっしゃる。

「いいえそれはなりません。帝が輕輕しく遊ばされては、この上にも非難がかかりますゆえおとどまり遊ばしますように」

と、御愛情の深さを喜びつつ、

かぎりとして別る道のかなしきにかまほしきは命なりけり

(別れて行く悲しきにつけても生きていたいの私の命です)

と、いう一首を残して里屋敷へ退り、やがて間もなく世を去られてしまった。

「その時の私はどうしたのだ」

命婦の話を聞かたに源氏は憤然と叫ぶ。

「母上とはいえ光様とは御身分が違います。桐壺様は大臣家のお生まれではなかつたのですが、帝の強い愛情が周囲の非難をはねのけて迎えられたのですから、里屋敷へお戻りになれば御縁も切れてしまいます。殊にその時は光様がまだ三歳でございました」

「母上ほどお気の毒なお方はこの世にあるまい」

「然しそれもすぎ去った昔の事ですから、あまり口にはお出し下さいませんに」

「父の帝は女御たちの呪詛をご存じだったのか」

「いいえご存じありませんでした。桐壺様の御病気が皆様の呪いとお気がつかれず、世を去られてのちに初めておさとりになり、

宮城野の露吹き結ぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ

（今日のように風の荒れる日は貴女に預けてある光君の事が思われてならない）

と、いうお歌を下されて、光様のお身の上を思いやって下さいました」

その時の源氏は二条に里屋敷を持ち、宮中にも殿舎を賜わって双方を往復し、祖母に当る桐壺の母に養育されていたのだ。

「母の最期を聞くたびに恋しくて恋しくてたまらなくなる。もし私が母であつたら、女御たちの呪いの場所を帝に示し、邪な女たちを宮中から追い出してしまったであろうに、心弱く負けてしまわれたかと思うと、残念でたまらな

い」

と、母の死ぎわを聞くたびに、今でも源氏は涙するのだ。三歳にして母を失う淋しさは、生涯をつらぬく無常観にもつながって

「母を持たぬ身がどれほど淋しいか、どれほど悲しいか他人には判らない。病いを得て世を終ったのであれば諦めもつくが、帝の愛を受けたばかりにこのような苦難に会われたのかと思うと、今からでもかたき討ちをしたいくらいだ」

「その頃の女御はいずれも世を去られたり、里屋敷へお戻りなされたりして一人も残ってはいらっしゃいません。すべては世のなりゆきと思召し下さいまし」

と、年老いた命婦は、母恋うる子を慰めるようにいうのであったが、源氏はなかなか心がおさまらず

「弘徽殿の女御はまだ世にときめいているではないか」

「あれは皇太子様の母上ですから致し方ありません。弘徽殿の女御にしても、光様が皇太子に立てられるのではないかとびくびくした事があるのですよ」

「今はもうそんな心配はなく女御のお産みになった皇子が皇太子になり、私は臣下に退っている」

「それも帝が行く末を考えてなされたのです。今頃まで皇

子のままでおいであそばしたら、光様まで命を落されたかも知れませんか。弘徽殿の女御は、光様が春宮に立つのではないかと疑って御身辺を狙った事さえあるのです」

「ああ、聞くだけでもぞっとする」

「わたくしだって思い出すと体が縮みます。あの時には帝も光様を春宮にお立てなさる下心があたりだったのですけれど、ちょうどその時、高麗から有名な人相見が来朝したので、帝は光様の将来を占わせて御覧になりました」

「その事ならば知っているよ」

「帝は本当に光様をお愛しになったのですね。お愛しになればこそあれほど御心配下すったのです」

と、その頃の出来事を思い返しては嘆いている。鴻臚館に滞在の人相見は、源氏の顔をしげしげと見つめ

「このお方が帝になると国家の不祥事を招く。今のうちに臣籍へ下し、帝を輔佐するお役目につければ天下一の大政治家になられるでしょう」

と、面をおかしてお答え申したのだ。桐壺帝はうなずかれて、

「桐壺でさえあのような死をとげたのに、光を東宮に立てたら母と同じ運命になろう」

と、その日の内に臣籍に下し、源氏の姓を賜わると同時

に、弘徽殿女御の第一皇子を皇太子に立てられた。あれやこれや、すぎこし方を思い浮べるにつけても、母を慕う源氏の憂いは消える時がなくな

「藤壺の宮は母上そのままのお姿と聞いたが間違いはないか」

「もうその事は仰せ遊ばしますな。どれほど似てお在でもお近づきになる事は出来ません」

「そういつてくれるな。母のお顔を知らぬだけに、隙見をしても藤壺様のお姿を見たいと思う」

「いいえいけません。飛んでもない事です」

と、命婦は強く首をふる。

藤壺は先帝の四の宮で、桐壺更衣に似ていると聞かれて、御入内になった女御であり、御寵愛も殊の外深いと聞える。

「そのような事をお口に出されたらどんな非難を受けるか知れないではありませんか。決してお考え遊ばしまするな」

「他意があつて望むのではない。母の面影を忍びたいと思うだけなのだから、哀れと思つてお許し下さるのではあるまいか」

「いいえ駄目です。お許しの頂ける筈はないのですから、

これからのちも藤壺様のお話だけはなさらないように」

「命婦が力になってくれなければお目にかかれないよ」

「力になるどころか、お断り申します。昔とは違って奥様もお持ちになったのですから」

話が藤壺の上に落ちると、命婦は逃げるように帰って行く。源氏は十二歳の時に元服して結婚した。妻は左大臣の姫の葵の上だった。左大臣の妻は帝の妹であったから源氏には従姉に当り四歳も年長の姉女房だ。初めは皇太子の妃に所望されたお人なのだが、父の左大臣は源氏を見込んで元服と同時に結婚させた。美しくはあったが気位が高くて性格が冷たく、年下の良人にも無表情にむつりしていて、妻らしい愛情のない女なのだ。然し源氏が嫌いなのではなく、一通りの事は尽しているのだが、何処となく冷たさがつきまとい、妻によって満足する日は殆どなく

「つまりぬ結婚をしてしまった」

と、愚痴をこぼす事もしばしばだったが、左大臣の娘だけに粗略には出来ず、心にそまぬ人と思ひながらも諦めてくらししている。従者の惟光は

「葵様は葵様として置いてお心にかなうお人をお探しになればよいではありませんか」

「そうはいってもなかなか見つからない。好きな恋人は偶

然めぐり会うもので探したところで居るものではない」

「然し会って見たいと思うお人のないわけではありませんまい」

「それはある」

「それなら問題はありません。好きな人の家へお通いになればよいのですから」

「いいや。それがたやすくは通って行けない人なのだ」

「なぜなのでしょう。お好きな人があるのなら、あとは惟光にお任せ下さい。源氏の君に想われてお言葉に従わぬ女がいるとは思えません」

「私が好きだと思ふ相手があれば首尾をしてくれるか」

「いたしますとも。会いたいとおっしゃるお方が判りさえすれば、どんな首尾でもいたします」

「そういつてくれると気が強くなるのだが、どうしても会いたい人がいるのだよ」

「これはまた珍しい事をおっしゃるではありませんか。長年お側に居りながら初めてこんなお言葉を聞きました。それほどに想うお方なら、どんな苦勞をしてもお望み通りにして見せましょう」

「それを誓ってくれるか」

「誓うよりも先に、相手は一体誰方なのです」

「藤壺の宮だ」

「えっ、な、何ですって」

「藤壺様を慕っているのだ」

「まあ何という事をおっしゃるのです。臣籍へおくだりになったとはいえ、帝の皇子である事は天下に隠れもないではありませんか」

「それだから私も悩んでいる」

「悩むも悩まぬもありません。藤壺様は帝の女御であり、義理の母上に当るお方です」

「それが判っているから悩むのだ」

「困る事をおっしゃるお方、かりそめにも母上に想いを寄せるとは」

「惟光までがそのようにいうのか」

「誰だっていうでしょう。母と名のついた人を想うという事がありまじょうか」

「藤壺様は亡くなった母上に生写しだという。それを聞くたびに胸が痛くなる。自分の母がどのようなお姿をしていたか、どのようなお顔立ちのお人であったか知りたい。藤壺の宮のお姿から亡き母を忍びたい。色めいた事ではないのだから、お目にかかれる工風をしておくれ」

「何とおっしゃられてもこればかりはお引き受け致しかね

ます。帝が藤壺様をお所望遊ばされたのも、桐壺様の面影が忘れかねて御入内をおすすめ申したのですから」

「それだけ聞いても胸が慄える。母恋うる心がはり裂けんばかりなのに」

「藤壺の宮を御覧になったところで母上様の生きて戻る訳ではありませんよ」

「生きて戻らぬからいいよ会いたい。かほどまでに想う心を判ってはくれないのか」

「判っては居りますが相手は帝の大切な人、お目にかかる道がないではありませんか」

「そうか。それなれば仕方がない。誰をも頼まずに一人で行く。誰にそしられようとも構わぬ。藤壺様に会いに行くぞ」

と、狂人のような声になった。

二

「なぜそう無理ばかりおっしゃるのです。私にしても出来る事と出来ぬ事があるではありませんか」

と、惟光もほとほと困りはててしまった。

帝の想い人に会おうとは、何人にも望めぬ難事だ。藤壺御殿は飛香舎の別名で前裁に藤の古木を植えてあるので

藤壺のお名がついている。源氏は桐壺更衣の淑景舎を宮中の住居にして二条院へ行ったり、禁裏に宿直したりしているが、桐壺と藤壺とはそれほど遠くではない。忍んで行くことすれば簡単に行けるだけに

「母の面影を求めると心持を判ってくれないのならもう頼まぬ。一人で忍んで行く」

「何処まで私を困らせようとなさるのです。帝の御寵愛は藤壺様を集めて、禁裏中の目が御身辺を見ているのではありませんか。人に知られたらどうなさるのです」

「そんなへまはせぬ。ひとりで見事に忍んで見せるぞ」

「お側には王命婦がお付き申しているのですよ。命婦たちの中では誰よりも利口者だし、王命婦のいる限りは忍んで行ける筈がありません。見つかつて声をたてられたらどうなさいます。それが帝のお耳にでも入ったら宮中はおろか都中に住む場所がなくなってしまうす」

そういうられるとはとする。父の寵妾で義母に当る人だけに、それこそ身の上の一大事だが、何といわれても諦めはつかない。

時候もちょうど四月の中ばで、春から夏へ移行行くよい季節だけに、十七歳の若い源氏は、押えがたい悩ましさを散らすべく、すがもなく青年従者の良清を呼び出した。

源氏と惟光とは乳兄弟で、惟光の母の乳で育っただけに、主従とはいえ親しみが深く、源氏もへだてを置かなかったし、惟光も無遠慮にものをいう。主人とはいえ間違いがあれば承知をしないのだが、良清は唯の従者で何をいわれてもおとなしく聞く。

「花の匂いが心を悩ますような季節だな」

遠廻しにそんな事からいい始めた。

「はい何処の壺前栽にも美しい花が咲き乱れて居ります」

良清もうつとりと答える。惟光は三十に近いのだが、良清はまだ二十一歳の多感な青年で、源氏と同じような若い憂いを胸のうちに秘めている。

「花は暮れ方が美しいと思わぬか」

「思います。日の暮れ合いのはらはらと散る景色を見ると、自分のような無風流者でも歌を詠んで見たくなりまして」

「藤壺の藤も美しかろうな」

「恐らくは今が見頃でございましょう」

「どうだ。こっそりと見に行く気はないか」

「いえいえそれは飛んでもない事で、藤壺様のお庭へ入ったら唯事ではすみません。御寵愛の深いお方だけに近づくだけでも恐しい」